

# 心の宿の宮城野よ

## しまぎきとうそん ～島崎藤村追想

宮城野区文化センター

村上 佳子



昨年3月、市民図書館を最後に仙台市役所を定年退職し、現在はJR仙石線の陸前原ノ町駅に隣接する宮城野区文化センターで新たな仕事に取り組んでいます。

『大地』に初めてエッセイを書かせていただいた2006年（第44号）に、仙台の文学的記憶のひとつとして、島崎藤村が東北学院の教師をしていたことを紹介しましたが、今回は改めて藤村の足跡をたどってみたいと思います。

ここ数年一段と賑わいを見せている仙台駅東口。駅のロータリーから北に入る商店沿いの道は藤村の詩にちなんだ「初恋通り」の通称があり、その先の名掛丁には藤村の名を冠した広場が整備されています。「藤村広場」は島崎藤村が下宿していた「三浦屋」があった場所で、その下宿のひと部屋で遠くに荒浜の波の音を聞きながら数々の詩を生み出したという若き日の藤村と仙台のゆかりを伝える場所となっています。

明治29（1896）年9月、島崎藤村は東北学院の英語と作文の教師として仙台に赴任します。当時24歳、東京の明治女学校で英語を教えていましたが、敬愛する先輩文学者・北村透谷の自殺、婚約者のある教え子へのかなわぬ恋、水道鉄管事件の連座による長兄の逮捕といった事態に直面し、失意の底での来仙でした。

東北の穏やかな暮らしに藤村の心は徐々に癒され、学舎の図書室で読書に励む日々の中で、新しい言葉が生み出されていきます。後に「破戒」「新生」「夜明け前」などの小説で日本を代表する作家として広く知られる藤村ですが、文学者としての最初の成功は仙台で書かれた抒

情詩によるものでした。藤村自身が「黙しがちなわたしの唇はほどけて来た」と語っているように、仙台に滞在した10か月たらずの間に新体詩といわれる抒情的な詩を次々と雑誌に発表していきます。これらの詩は、藤村が仙台から東京へ戻った直後の明治30年8月、『若菜集』として出版され、日本近代詩の出発を告げる歴史的な作品となりました。「藤村広場」には、『若菜集』の表紙を刻んだ記念碑が設置されています。



藤村広場にある「日本近代詩発祥の地」記念碑

「藤村広場」にはこの記念碑のほかに、仙台城址から移された「草枕」の一節が刻まれた詩碑と、藤村が友と散策したという荒浜海岸の記憶をとどめた「荒浜春の潮音」詩碑も建てられています。この碑は荒浜地区の個人のお宅に建立されたものでしたが、東日本大震災後、名掛丁の有志の方の献身的な搜索で瓦礫のなかから発見され、この場所に移設されました。刻まれた詩はともに『若菜集』に収められています。

道なき今の身なればか  
われは道なき野を慕ひ  
思ひ乱れてみちのくの  
宮城野にまで迷いきぬ

心の宿の宮城野よ  
乱れて熱き吾身には  
日影も薄く草枯れて  
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は  
吹く北風を琴と聴き  
悲しみ深き吾目には  
色彩(いろ)なき石も花と見き  
(「草枕」より)

湧きて流るゝ 八百潮の  
そこにいざよう 海の琴  
調べも深し 百川の  
萬の波を 呼びあつめ  
時満ちくれば うらゝかに  
遠くきこゆる 春の潮の音  
(「潮音」)

「藤村広場」で若き日の作家の姿を想像していると、やはり藤村のふるさと馬籠への興味にかられ、冬の木曾路に出かけてみることにしました。

馬籠は、江戸と京都を結ぶ旧中山道のほぼ中間に位置する宿場町で交通の要所として栄えた町です。島崎家は江戸時代、馬籠宿の本陣（大名などの要人が泊まる公認の宿）を務める名家でしたが、明治期には宿駅が廃止され一家は没落していきます。藤村は9歳にして家の再興を担うべく上京し、親類宅に寄宿して勉学に励みますが、やがて文学の道歩むこと

になります。

長野県山口村から現在は岐阜県中津川市となった馬籠の島崎家跡地には「藤村記念館」が建ち、宿場町の風情の中で趣あるたたずまいを見せています。旧家を思わせる館内には藤村の生涯とその作品をたどる様々な資料が展示されていますが、折しも『若菜集』発刊120年を記念する企画展示が開催されており、藤村の仙台での足跡も大きく紹介されていました。

妻を亡くした後、実の姪と道ならぬ関係に陥りながら、その苦悩さえも小説に昇華させた島崎藤村。後年、日本ペンクラブの初代会長も務めたその文豪が歩んだ道で、「夜明け前」の有名な書き出しをつぶやいてみました。「木曾路はすべて山の中である・・・」



馬籠の藤村記念館前

記念館が建つ街道沿いには民宿や茶屋風の店が並び、岐阜名物の「ごへい餅」も売られていました。今年のNHK朝ドラに登場していたことを思い出し、甘辛く香ばしい風味のひとつをいただきながら木曾路を後にしました。